

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	畠山 歌子
論文題目	18世紀ロシア貴族の教育文化—国家勤務者のための教育とその変容—		
(論文内容の要旨)			
本論文はロシア貴族史の一環として、18世紀におけるその教育文化の生成に関する一連の研究をまとめたものである。序論、第1章「貴族身分の形成・勤務・教育」、第2章「家庭および私立学校の教師資格試験制度導入とその実施状況」、第3章「貴族の教育体験」、第4章「貴族上層のヨーロッパ旅行」および結論からなり、末尾に文書館史料のほか、帝政期ロシアおよびソ連、欧米、日本における当該研究テーマにかかわる、計117点の主要参考文献が掲げられている。 論者は序章において、20世紀90年代半ばまでに欧米およびソ連・ロシアのロシア貴族史研究に現れた諸説とその変遷を概観し、特徴付けと評価を行っている。その上で論文が追求するテーマは、多岐にわたる貴族史研究分野の中ではエリートのエートスに関する社会文化史研究に最も近いものと位置づける。ついで、学派間で行われた論争に触れ、今後の研究で検証されなければならない主要な論点を洗い出す。1991年のソ連崩壊後、ロシア貴族研究の環境にも大きな転機が訪れ、古文書館所蔵史料閲覧の制約が緩和されたり、貴族の私的文書類、回想録類などの新刊、復刊のブームが見られた。そのため世界的にロシア貴族史研究は活性化し、ロシアの研究者も巻き込んだ文化史研究や学際的研究へと多様化し、発展を見せているとする。そして、近年のこの新しい研究動向を踏まえたうえで、「公・私」の境界が曖昧なロシア的特殊性に配慮しつつ、従来、研究テーマから外されてきた家庭や私立学校、国外で行われる教育形態を明らかにすることを課題として設定している。 第1章では、1990年代以降の貴族史研究において貴族身分内の階層差が共通認識となっていることを確認し、第1節で「官等表の導入と貴族身分形成プロセス」、第2節で「貴族身分出身者の階層別構成」、第3節で「階層差と『貴族家系書』の作成」、第4節で「教育形態を選択する特権」を論じている。また、貴族身分の階層的多様性と教育文化の多様性との対応関係を検討し、一見ピョートル改革の骨抜きにも見える1762年の「貴族解放令」が勤務義務撤廃と教育選択の自由という特権を与えたことの意義を特筆する。さらに、家庭教育と査閲制度を定めた1737年法以後に生じた貴族の階層別の「国家勤務観」に多方面からの考察を加えている。 第2章は「1757年資格試験令以前の外国人教師」、「モスクワ大学と科学アカデミーにおける資格試験」、「資格試験制度の社会的評価」、「教育文化史における資格試験制度の意義」の4節からなる。論者は私教育関連史料が数量的に			

制約のあるなかで、ロシアのアーカイブで発掘した新史料も含む一次史料およびそれに準ずる史料類によって分析を進め、幾多の欠陥と矛盾を内包した外国人教師資格試験制度が、それでもなお一定の実効性を発揮し、後のロシア貴族文化の展開に大きな影響を与えたものと評価している。

第3章「貴族の教育体験」では、18世紀ロシア貴族教育の現実的成果ともいえる7名の貴族（女性1名を含む）をとりあげ、教育プロセスとその結果を検証する手段として、回想録史料にもとづいた個別事例の分析をおこなう。論者は各人の回想録から、論文のテーマに直接かかわる「教育の主導者、担い手」、「階層差が子弟の教育に与えた影響」、「生地や教育環境との関係」、「国家勤務を意識する度合い」の4項目を抽出して考察する。事例となった7名は親や本人の貴族階層内ステータス、生活環境や経済条件（みな家庭教師を雇える程度以上ではあるが）、受けた教育体験などが大きく異なるにもかかわらず、3類型に分けることができると結論する。また、すべての事例に共通してロシア語教育が重視されており、先行研究はこの点を見逃していたと指摘する。

最終の第4章は、「ロシア貴族のヨーロッパ旅行」、その典型的な事例である「パーヴェル・アレクサンドロヴィチ・ストロガーノフのヨーロッパ旅行」の2節、および両節を概括した「おわりに」からなる。経済的に恵まれない貴族子弟が国の奨学金制度を利用して学位取得を目指す留学に赴いたのに対し、上流貴族の子弟は「奨学金をあてにせず、独自の教育計画を立てて修学旅行に出発し」た。そこには英国の「グランド・ツアー」との共通点があるとしながらも、「国家に奉仕する愛国者にふさわしい教養を取得するための重要な教育体験の場」であったという点で本質的に異なるとする。革命下のパリ生活を体験したストロガーノフは思想的な洗礼を受けて自由に目覚め、エカテリーナ2世から呼び戻されるが、論者は研究者ラエフ同様、この事例からひとつのロシア的特殊性、すなわち貴族出自のインテリゲンツィアや貴族革命家誕生の淵源を読み解いている。

「結論」においては論文内容を簡潔にまとめ、今後取り組むべき女性史、ジェンダー史的諸課題を提起している。

(論文審査の結果の要旨)

欧米における伝統的貴族史研究に比して、ロシアのそれはソ連崩壊の約20年前まで存在した研究上の制約のため、国際的レベルでの研究交流の対象とはなりにくかった。論者の研究は、ようやくその呪縛が解かれ、諸史料の閲覧が可能となった時代の到来によって実現した。欧米の貴族史研究もその後歴史学全般の総合的方向への発展を反映して研究分野を大幅に拡大させ、ロシアでもまたそれらと呼応できる体制が整ってきたことも幸いしたといえよう。

一方、日本におけるロシア貴族教育文化史につながる研究は、ごく少数の研究者にとって取り組まれてきたにすぎない。このような研究環境において、後発のロシア貴族がヨーロッパ貴族とは異なり、「国家勤務者」として育成されていった過程を教育文化の変容の視点から捉えようとする論者の試みは、大きな意義を有している。ロシア貴族のメンタリティーとその形成過程を解明することは、歴史研究という専門枠を超えて、ロシア文化に関わるはば広い研究諸領域にとっても有益な知見をもたらすものである。

論文の基本的内容は4つの独立した章に収められている。大半はすでに複数の専門学会の学会誌に厳正な審査を経て掲載された論文に加筆修正したものであり、新稿は第3章のみである。各章は内容的に独立しているとはいえ、相補的連関性をもって論文のテーマを追求している。論者はピョートル1世からエカテリーナ2世までの治世下において、当初の制度設計がロシア貴族文化の内在的要因と現実的諸条件によって急激な変容過程をたどり、その結果どのような「人材」が実際に育成されたかを説得的に検証している。

論者の研究の特徴は次の3点にまとめることができる。

- (1) 先行研究の達成点を精選し、批判的視点から妥当と思われる説を史料に即して慎重に再検証するという姿勢。
- (2) 抽象的な論理操作によってではなく、あくまでも史料を比較対照しながら読み込んで実態に迫ろうとする構え。
- (3) ともしれば客観性に難があると見られてきた回想録類や書簡、日記類などの史料に、微視的な史料至上主義に陥ることを避けつつ、時代の大きな傾向を読み取ろうとする視点。

結論において論者は以下の点を指摘している。ロシア貴族は国家勤務者育成を目的とする家庭教育を通して、ロシア社会に対する自らの使命を自問し、新しい貴族像を模索しようとしたこと。他方、貴族身分の階層的序列が固定化し、専門知識を持つ官僚が行政を担うようになると、貴族の家庭教育の目的は国家勤務以外の新しい領域での活動や自己の教養に向けられたこと。国家勤務にもとづく志向・行動・生活様式を持つ従来の貴族の中から、国家勤務の意義ある

いは国家との関係を見直す新しい世代の貴族が形成されていった背景には、ロシア貴族のこのような教育環境が存在していたこと。

たしかに、ロシア貴族文化の最良部分を担ったエリートたちについては、この見解は妥当である。しかし、この教育環境は同時に、生きる方向を見失って社会的徒食者に堕した貴族子弟も生み出すものであったことを見落としてはならない。それは、教育環境という要因だけで説明することのできない複合的現象であることは明らかである。論者自身が指摘しているように、現在各国のロシア貴族史研究は「総合的な研究」を目指している。論者が今後この方向に沿って、ロシア貴族教育文化史の総合的研究を推進することを期待したい。

以上を総合して、本論文は教育文化史という新しい視点から我が国におけるロシア貴族史研究に貢献した意欲的な業績であると評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年11月19日に論文内容とそれに関連する事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降